

記事

[Tomohiro Iwamoto](#) · 2021年5月18日 17m read

microk8sでKubernetesをお手軽に試す

目的

Japan Virtual Summit 2021で、Kubernetesに関するセッションを実施させていただいたのですが、AzureのアカウントやIRIS評価用ライセンスをお持ちの方が対象になっていました。もう少し手軽に試してみたいとお考えの開発者の方もおられると思いますので、本記事では仮想環境でも利用可能なk8sの軽量実装である [microk8s](#)で、IRIS Community Editionを稼働させる手順をご紹介します。

2022/1/7 若干の加筆・修正しました

マルチノード化する手順は [こちら](#) に記載しています。

参考までに私の環境は以下の通りです。

用途	O/S	ホストタイプ	IP
クライアントPC	Windows10 Pro	物理ホスト	172.X.X.30/24, (vmware NAT)192.168.11.1/24
microk8s環境	ubuntu 20.04.1 LTS	上記Windows10上の仮想ホスト(vmware)	192.168.11.49/24

ubuntuは、 [ubuntu-20.04.1-live-server-amd64.iso](#)を使用して、最低限のサーバ機能のみをインストールしました。

概要

IRIS Community EditionをKubernetesのStatefulSetとしてデプロイする手順を記します。IRISのシステムファイルやユザデータベースを外部保存するための永続ストレージには、microk8s_hostpathもしくはLonghornを使用します。使用するコードは [こちら](#) にあります。

インストール

microk8sをインストール・起動します。

```
$ sudo snap install microk8s --classic --channel=1.20
$ sudo usermod -a -G microk8s $USER
$ microk8s start
$ microk8s enable dns registry storage metallb
?
?
Enabling MetallB
Enter each IP address range delimited by comma (e.g. '10.64.140.43-10.64.140.49,192.168.0.105-192.168.0.111'):192.168.11.110-192.168.11.130
```

ロードバランサに割り当てるIPのレンジを聞かれますので、適切な範囲を設定します。私の環境はk8s稼働して

いるホストのCIDRは192.168.11.49/24ですので適当な空いているIPのレンジとして、[192.168.11.110-192.168.11.130]を指定しました。

この時点で、シングルノードのk8s環境準備されます。

```
$ microk8s kubectl get pods -A
NAMESPACE          NAME                                READY   STATUS    RESTARTS   AGE
ARTS    AGE
metallb-system     speaker-
gnljw              1/1      Running   0           45s
metallb-system     controller-559b68bfd8-bkrdz
45s
kube-system        hostpath-
provisioner-5c65fbd4f-2z9j8    1/1      Running   0           48s
kube-system        calico-node-
bwp2z              1/1      Running   0           65s
kube-system        coredns-86f78bb79c-
gnd2n              1/1      Running   0           57s
kube-system        calico-kube-controllers-847c8c99d-
pzbvb 1/1      Running   0           65s
container-registry registry-9b57d9df8-bt9tf      1/1      Running   0           48s
$ microk8s kubectl get node
NAME      STATUS   ROLES    AGE   VERSION
ubuntu   Ready    <none>   10d   v1.20.7-34+df7df22a741dbc
```

kubectl実行時に毎回microk8sをつけるのは手間なので、記コマンドでエイリアスを設定しました。以降の例ではmicrok8sを省略しています。

注意

すでに"普通の"kubectlがインストールされていると、こちらが優先されてしまいますので、alias名をkubectl2にするなど衝突しないようにしてください。

```
$ sudo snap alias microk8s.kubectl kubectl
$ kubectl get node
NAME      STATUS   ROLES    AGE   VERSION
ubuntu   Ready    <none>   10d   v1.20.7-34+df7df22a741dbc
```

元の状態に戻すには `sudo snap unalias kubectl`

環境が正しく動作することを確認するためにIRISを起動してみます。記コマンドの実行で、USERプロンプトが表示されるはずですが、

```
$ kubectl run iris --image=containers.intersystems.com/intersystems/iris-
community:2021.1.0.215.3
$ watch kubectl get pod
$ kubectl exec -ti iris -- iris session iris
USER>
```

今後の作業に備えて、作成したPODを削除しておきます。

```
$ kubectl delete pod iris
```

起動

```
$ kubectl apply -f mk8s-iris.yml
```

IRIS Community版なので、ライセンスキーマンテナジストリにログインするためのimagePullSecrets指定していません。

しばらくするとポッドが2個作成されます。これでIRISが起動しました。

```
$ kubectl get pod
NAME          READY   STATUS    RESTARTS   AGE
data-0        1/1     Running   0           107s
data-1        1/1     Running   0           86s
$ kubectl get statefulset
NAME    READY   AGE
data    2/2     3m32s
$ kubectl get service
NAME          TYPE           CLUSTER-IP      EXTERNAL-IP      PORT(S)          AGE
kubernetes   ClusterIP      10.152.183.1    <none>           443/TCP          30m
iris         ClusterIP      None            <none>           52773/TCP        8m55s
iris-ext     LoadBalancer   10.152.183.137 192.168.11.110  52773:31707/TCP 8m55s
```

ポッドのSTATUSがrunningにならない場合、記コマンドでイベントを確認できます。イメージ名を違って指定してPullが失敗したり、なんらかのリソースが不足していることが考えられます。

```
$ kubectl describe pod data-0
```

```
Events:
  Type     Reason             Age             From             Message
  ----     -
Warning   FailedScheduling   4m (x3 over 4m3s)  default-scheduler  0/1 nodes are available: 1 pod has unbound immediate PersistentVolumeClaims.
Normal    Scheduled          3m56s          default-scheduler  Successfully assigned default/data-0 to ubuntu
Normal    Pulling            3m56s          kubelet           Pulling image "containers.intersystems.com/intersystems/iris-community:2021.1.0.215.3"
Normal    Pulled             69s            kubelet           Successfully pulled image "containers.intersystems.com/intersystems/iris-community:2021.1.0.215.3" in 2m46.607639152s
Normal    Created            69s            kubelet           Created container iris
Normal    Started            68s            kubelet           Started container iris
```

記コマンドでirisにO/S認証でログインできます。

```
$ kubectl exec -it data-0 -- iris session iris
Node: data-0, Instance: IRIS
USER>
```

記でIRISインスタンスが使用するPVCが確保されていることが確認できます。

```
$ kubectl get pvc
NAME                                STATUS    VOLUME                                     CAPACITY   ACCE
SS MODES    STORAGECLASS    AGE
dbv-mgr-data-0    Bound     pvc-fbfdd797-f90d-4eac-83a8-f81bc608d4bc    5Gi        RWO
                microk8s-hostpath    12m
dbv-data-data-0    Bound     pvc-b906a687-c24c-44fc-
acd9-7443a2e6fec3    5Gi        RWO                microk8s-hostpath    12m
dbv-mgr-data-1    Bound     pvc-137b0ccf-406b-40ac-
b8c5-6eed8534a6fb    5Gi        RWO                microk8s-hostpath    9m3s
dbv-data-data-1    Bound     pvc-4f2be4f1-3691-4f7e-
ba14-1f0461d59c76    5Gi        RWO                microk8s-hostpath    9m3s
```

個別のポッド上のIRISの管理ポータルにアクセスする

記コマンドでポッドの内部IPアドレスを確認します。

```
$ kubectl get pod -o wide
NAME      READY   STATUS    RESTARTS   AGE   IP            NODE      NOMINATED NODE
READINESS GATES
data-0    1/1     Running   0           46m   10.1.243.202  ubuntu   <none>
<none>
data-1    1/1     Running   0           45m   10.1.243.203  ubuntu   <none>
<none>
$
```

私の仮想環境のLinuxはGUIがありませんので、記のコマンドを実行することで、Windowsのブラウザから管理ポータルにアクセスできるようにしました。

```
$ kubectl port-forward data-0 --address 0.0.0.0 9092:52773
$ kubectl port-forward data-1 --address 0.0.0.0 9093:52773
```

対象	URL	ユーザ	パスワード
ポッドdata-0上のIRIS	http://192.168.11.49:9092/cs p/sys/%25CSP.Portal.Home.zen	SuperUser	SYS
ポッドdata-1上のIRIS	http://192.168.11.49:9093/cs p/sys/%25CSP.Portal.Home.zen	SuperUser	SYS

パスワードはCPFのPasswordHashで指定しています

データベースの構成を確認してください。記のデータベースがPV上に作成されていることを確認できます。

データベース名	path
IRISSYS	/iris-mgr/IRIS_conf.d/mgr/
TEST-DATA	/vol-data/TEST-DATA/

停止

作成したリソースを削除します。

```
$ kubectl delete -f mk8s-iris.yml --wait
```

これで、IRISのポッドも削除されますが、PVCは残されまままになっていることに留意ください。これにより、次回に同じ名前のポッドが起動した際には、以前と同じボリュームが提供されます。つまり、ポッドのライフサイクル、データベースのライフサイクルの分離が可能となります。次のコマンドでPVCも削除出来ます(データベースの内容も永久に失われます)。

```
$ kubectl delete pvc -l app=iris
```

O/Sをシャットダウンする際には記を実行すると、k8s環境を綺麗に停止します。

```
$ microk8s stop
```

O/S再起動後には記コマンドでk8s環境を起動できます。

```
$ microk8s start
```

microk8s環境を完全に消去したい場合は、microk8s stopを「実行する前」に記を実行します。(やたらと時間がかかります。日頃は実行しなくて良いと思います)

```
$ microk8s reset --destroy-storage
```

観察

ストレージの場所

興味本位の観察ではありますが、/iris-mgrはどこに存在するのでしょうか? microk8sはスタンドアロンで起動するk8s環境ですので、storageClassNameがmicrok8s-hostpathの場合、ファイルの本体はホスト上にあります。まずはkubectl get pvで、作成したPVを確認します。

```
$ kubectl apply -f mk8s-iris.yml
```

```
$ kubectl get pv
```

NAME	CAPACITY	ACCESS MODES	RECLAIM POLICY
STATUS CLAIM	STORAGECLASS	REASON	AGE
pvc-ee660281-1de4-4115-a874-9e9c4cf68083	20Gi	RWX	Delete
Bound container-registry/registry-claim	microk8s-hostpath		37m
pvc-772484b1-9199-4e23-9152-d74d6addd5ff	5Gi	RWO	Delete
Bound default/dbv-data-data-0	microk8s-hostpath		10m
pvc-112aa77e-2f2f-4632-9eca-4801c4b3c6bb	5Gi	RWO	Delete
Bound default/dbv-mgr-data-0	microk8s-hostpath		10m
pvc-e360ef36-627c-49a4-a975-26b7e83c6012	5Gi	RWO	Delete
Bound default/dbv-mgr-data-1	microk8s-hostpath		9m55s
pvc-48ea60e8-338e-4e28-9580-b03c9988aad8	5Gi	RWO	Delete
Bound default/dbv-data-data-1	microk8s-hostpath		9m55s

ここで、data-0ポッドのISC_DATA_DIRECTORYに使用されている、default/dbv-mgr-data-0をdescribeします。

```
$ kubectl describe pv pvc-112aa77e-2f2f-4632-9eca-4801c4b3c6bb
?
?
Source:
  Type:          HostPath (bare host directory volume)
  Path:          /var/snap/microk8s/common/default-storage/default-dbv-mgr-
data-0-pvc-112aa77e-2f2f-4632-9eca-4801c4b3c6bb
```

このpathが実体イのありますかです。

```
$ ls /var/snap/microk8s/common/default-storage/default-dbv-mgr-
data-0-pvc-112aa77e-2f2f-4632-9eca-4801c4b3c6bb/IRIS_conf.d/
ContainerCheck csp dist httpd iris.cpf iris.cpf_20210517 _LastGood_.cpf mgr
$
```

storageClassNameにhostpathは使用しないでください。microk8s_hostpathとは異なり、同じフォルダに複数IRISが同居するような状態(破壊された状態)になってしまいます。

ホスト名の解決

StatefulSetでは、ポッドにはmetadata.nameの値に従い、data-0、data-1などのユニークなホスト名が割り当てられます。

ポッド間の通信に、このホスト名を利用するために、[Headless Service](#)を使用しています。

```
kind: StatefulSet
metadata:
  name: data

kind: Service
spec:
  clusterIP: None # Headless Service
```

この特徴は、ノード間で通信をするShardingのような機能を使用する際に有益です。本例では直接の値はありません。

nslookupを使いたいのですが、kubectlやk8sで使用されているコンテナランタイム(ctr)にはdockerのようにrootでログインする機能がありません。また、IRISのコンテナイメージはセキュリティ上の理由でsudoをインストールしていませんので、イメージのビルド時以外のタイミングで追加でソフトウェアをapt install出来ません。ここではbusyboxを追加で起動して、そこでnslookupを使ってホスト名を確認します。

```
$ kubectl run -i --tty --image busybox:1.28 dns-test --restart=Never --rm
/ # nslookup data-0.iris
Server:      10.152.183.10
Address 1:  10.152.183.10 kube-dns.kube-system.svc.cluster.local

Name:       data-0.iris
Address 1:  10.1.243.202 data-0.iris.default.svc.cluster.local
```

/ #

10.152.183.10はk8s用意したDNSサーバです。data-0.irisには10.1.243.202というIPアドレス割り当てられていることがわかります。FQDNはdata-0.iris.default.svc.cluster.localです。同様にdata-1.irisはDNSに登録されています。

独自イメージを使用する場合

現在のk8sはDockerを使用していません。ですので、イメージのビルドを行うためには別途Dockerのセットアップが必要です。

k8sはあくまで運用環境のためのものです

サンプルイメージを使用する場合

イメージはどんな内容でも構いませんが、ここでは例として [simple](#)

を使用します。このイメージはMYAPPネームスペース上で、ごく簡単なRESTサービスを提供します。データの参照先をコンテナ内のデータベース(MYAPP-DATA)から外部データベース(MYAPP-DATA-EXT)に切り替えるために、cpfのactionにModifyNamespaceを使用しています。mk8s-simple.ymlとしてご用意しました(mk8s-iris.ymlとほとんど同じです)。これを使用して起動します。

自分でイメージをビルドする場合

ご自身でビルドを行いたい場合は、記の手順でmicrok8s用意した組み込みのコンテナレジストリに、イメージをpushします。

内容のわからない非公式コンテナイメージって...ちっ!気持ち悪いかも、ですよ。

(Docker及びdocker-composeのセットアップが済んでいること)

```
$ git clone https://github.com/IRISMeister/simple.git
$ cd simple
$ ./build.sh
$ docker tag dpmeister/simple:latest localhost:32000/simple:latest
$ docker push localhost:32000/simple:latest
```

このイメージを使用するように、ymlを書き換えます。

```
mk8s-simple.yml???
?)          image: dpmeister/simple:latest
?)          image: localhost:32000/simple
```

起動方法

既にポッドを起動しているのであれば、削除します。

```
$ kubectl delete -f mk8s-iris.yml
$ kubectl delete pvc -l app=iris

$ kubectl apply -f mk8s-simple.yml
$ kubectl get svc
NAME                TYPE                CLUSTER-IP          EXTERNAL-IP          PORT(S)              AGE
kubernetes          ClusterIP           10.152.183.1        <none>               443/TCP              3h36m
iris                 ClusterIP           None                <none>               52773/TCP            20m
iris-ext             LoadBalancer       10.152.183.224     192.168.11.110     52773:30308/TCP     20m
$
$ curl -s -H "Content-Type: application/json; charset=UTF-8" -H "Accept:application/json" "http://192.168.11.110:52773/csp/myapp/get" --user "appuser:SYS" | python3 -mjson.tool
{
  "HostName": "data-1",
  "UserName": "appuser",
  "Status": "OK",
  "TimeStamp": "05/17/2021 19:34:00",
  "ImageBuilt": "05/17/2021 10:06:27"
}
```

curlの実行を繰り返すと、HostName(RESTサービス動作したホスト名)がdata-0だったりdata-1だったりしますが、これは(期待通りに)ロードバランスされているためです。

まれにログインに失敗したり、待たされる場合があります。Community EditionはMAX 5セッションまでですが、以前のからの操によりその上限を超えてしまっている可能性があります。その場合、ライセンス上限を超えた旨のメッセージがログされます。

```
$ kubectl logs data-0
?
?
05/17/21-19:21:17:417 (2334) 2 [Generic.Event] License limit exceeded 1 times since instance start.
```

Longhornを使用する場合

分散KubernetesストレージLonghornについては、[こちら](#)を参照ください。

IRISのようなデータベース製品にとってのメリットは、クラウド環境でアベラビリティゾーンをまたいだデータベースの冗長構成を組むことにあります。アベラビリティゾーン全体停止への備えは、ミラ構成を組むことで実現しますが、Kubernetes環境であれば、分散Kubernetesストレージの採用という選択肢が増えます。

ミラ構成異なり、データベース以外のファイルは備えられるというメリットもあります。ただしパフォーマンスへの[負のインパクト](#)には要注意です。

起動方法

longhornを起動し、すべてのポッドがREADYになるまで待ちます。

```
$ kubectl apply -f https://raw.githubusercontent.com/longhorn/longhorn/v1.2.3/deploy/
```



```
longhorn.yaml
```

```
$ kubectl -n longhorn-system get pods
```

NAME	READY	STATUS	RESTARTS	AGE
longhorn-ui-5b864949c4-72qkz	1/1	Running	0	4m3s
longhorn-manager-wfpnl	1/1	Running	0	4m3s
longhorn-driver-deployer-ccb9974d5-w5mnz	1/1	Running	0	4m3s
instance-manager-e-5f14d35b	1/1	Running	0	3m28s
instance-manager-r-a8323182	1/1	Running	0	3m28s
engine-image-ei-611d1496-qscbp	1/1	Running	0	3m28s
csi-attacher-5df5c79d4b-gfnrc	1/1	Running	0	3m21s
csi-attacher-5df5c79d4b-ndwjn	1/1	Running	0	3m21s
csi-provisioner-547dfff5dd-pj46m	1/1	Running	0	3m20s
csi-resizer-5d6f844cd8-22dpp	1/1	Running	0	3m20s
csi-provisioner-547dfff5dd-86w9h	1/1	Running	0	3m20s
csi-resizer-5d6f844cd8-zn97g	1/1	Running	0	3m20s
csi-resizer-5d6f844cd8-8nmfw	1/1	Running	0	3m20s
csi-provisioner-547dfff5dd-pmwsk	1/1	Running	0	3m20s
longhorn-csi-plugin-xsnj9	2/2	Running	0	3m19s
csi-snapshotter-76c6f569f9-wt8sh	1/1	Running	0	3m19s
csi-snapshotter-76c6f569f9-w65xp	1/1	Running	0	3m19s
csi-attacher-5df5c79d4b-gcf4l	1/1	Running	0	3m21s
csi-snapshotter-76c6f569f9-fjx2h	1/1	Running	0	3m19s

mk8s-iris.yamlの全て(2箇所あります)のstorageClassNameをlonghornに変更してください。
もし、microk8s_hostpathで既に起動しているのであれば、ポッド、PVC共に全て削除しうえて、上述の手順
を実行してください。つまり...

```
$ kubectl delete -f mk8s-iris.yaml --wait  
$ kubectl delete pvc -l app=iris
```

```
mk8s-iris.yaml??
```

```
? )storageClassName: microk8s-hostpath  
? )storageClassName: longhorn
```

```
$ kubectl apply -f mk8s-iris.yaml
```

マウントしたLonghorn由来のボリュームのオーナーがrootになっているのでsecurityContext:fsGroupを指定し
ています。これ無しでは、データベース作成時にパーミッションエラーが発生します。

fsGroup指定なしの場合

```
$ kubectl exec -it data-0 -- ls / -l  
drwxr-xr-x  3 root      root          4096 May 18 15:40 vol-data
```

fsGroup指定ありの場合

```
$ kubectl exec -it data-0 -- ls / -l  
drwxrwsr-x  4 root      irisuser      4096 Jan  5 17:09 vol-data
```

記を実行すれば、Windowsのブラウザから、[Longhorn UI](#)を参照できます。

```
$ microk8s enable ingress
$ kubectl apply -f longhorn-ui-ingress.yml
```

ポート80を他の用途に使ってる場合、記のようにport-forwardを使う方法もあります。この場合ポートは8080なので、URLは [こちら](#) になります。

```
$ kubectl -n longhorn-system port-forward svc/longhorn-frontend 8080:80 --address 0.0.0.0
```

UIで、VolumeのStateが"Degraded"になっていますが、これはReplicaの数がnumberOfReplicasの既定値3を満たしていないためです。

以降の操作は、同様です。不要になれば削除します。

```
$ kubectl delete -f mk8s-iris.yml
$ kubectl delete pvc --all
```

削除方法

Longhorn環境が不要になった場合は、記のコマンドで削除しておくのが良いようです(いきなりdeleteしてはダメ)

```
$ kubectl create -f https://raw.githubusercontent.com/longhorn/longhorn/v1.2.3/uninstall/uninstall.yaml
$ kubectl get job/longhorn-uninstall -n default -w
NAME                COMPLETIONS  DURATION  AGE
longhorn-uninstall  1/1          79s       97s
^C
$ kubectl delete -f https://raw.githubusercontent.com/longhorn/longhorn/v1.2.3/deploy/longhorn.yaml
$ kubectl delete -f https://raw.githubusercontent.com/longhorn/longhorn/v1.2.3/uninstall/uninstall.yaml
```

apply時のエラー

Longhornの前回の使用時に綺麗に削除されなかった場合に、apply時に記のようなエラーが出る場合があります

```
$ kubectl apply -f https://raw.githubusercontent.com/longhorn/longhorn/master/deploy/longhorn.yaml
?
?
Error from server (Forbidden): error when creating "https://raw.githubusercontent.com/longhorn/longhorn/master/deploy/longhorn.yaml": serviceaccounts "longhorn-service-account" is forbidden: unable to create new content in namespace longhorn-system because it is being terminated
Error from server (Forbidden)
```

上記のuninstall.yamlを使った削除手順をもう一度実行したら回復しました。

その他気づいた事

storageClassにmicrok8s_hostpathを指定した場合、[マルチノード環境](#)ではsecurityContext:fsGroupが正しく機能しないようです。その結果、記のようなエラーが発生して、データベースの作成が失敗します(Error=-13はPermission deniedです)。longhornは問題なく動作しました。

```
01/07/22-23:11:32:729 (1205) 1 [Utility.Event] ERROR #503: Error executing [Actions]
section in file /iris-mgr/IRIS_conf.d/merge_actions.cpf
01/07/22-23:11:32:729 (1205) 1 [Utility.Event] ERROR #507: Action 'CreateDatabase' fa
iled at line 2, Method Config.CPF:CreateOneDatabase(), Error=ERROR #5032: Cannot crea
te directory '/vol-data/db/TEST-DATA/', Error=-13'
```

InterSystems Kubernetes Operator

IKOはmicrok8sで動作しますが、Community向けの機能ではないので、今回のご紹介は見送りまし。

[#Kubernetes](#) [#InterSystems IRIS](#) [#InterSystems IRIS for Health](#)

ソースURL: <https://jp.community.intersystems.com/post/microk8s%E3%81%A7kubernetes%E3%82%92%E3%81%8A%E6%89%8B%E8%BB%BD%E3%81%AB%E8%A9%A6%E3%81%99>